

News Letter

演劇の総合的研究と演劇学の確立

The 21st Century Centre of Excellence Programme, Waseda University
Development of Research and Study Methodologies in Theatre

報告 国際サミュエル・ベケットシンポジウム (ボードレス・ベケット)	1
特集記事	
COE公開講座「浄瑠璃」	2
◆演劇理論研究(西洋/比較)コース	3
◆アーカイブ構築研究(映像)コース/演劇理論研究(舞踊)コース	4
◆芸術文化環境研究コース/ アーカイブ構築研究(演劇)コース	5
◆古典演劇研究コース/演劇理論研究(東洋)コース	6
イベントカレンダー	7
新刊紹介/編集後記	8

報告 国際サミュエル・ベケットシンポジウム 〈ボードレス・ベケット〉

2006年9月29日(金)～10月1日(日)
早稲田大学国際会議場

事業推進担当者 岡室美奈子

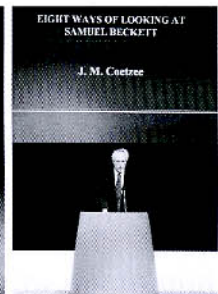
9月29日(金)から10月1日(日)まで、早稲田大学国際会議場において、早稲田大学21世紀COE演劇研究センターと日本サミュエル・ベケット研究会の主催、日本学術振興会の助成により、生誕百年記念国際サミュエル・ベケットシンポジウムが開催された。テーマは「ボードレス・ベケット」。2002年のCOE演劇研究センター発足時から準備を重ね、インターネット上で研究発表を募集するなど本格的な国際学会を目指してきた努力が実り、約60名の研究発表者のうち3分の2以上が海外約20ヶ国からの参加者という、文字通りボードレスなシンポジウムとなった。

このシンポジウムには、国際的に活躍する著名な研究者を数多く招聘した。とりわけ、早稲田大学本部の協力により、2003年にノーベル文学賞を受賞した、南アフリカ出身の作家J・M・クッツェー氏を招聘できたことは大きな成果である。初来日となった今回、「ベケットの八つの見方」と題して公開講演を行い、会場となった国際会議場井深大記念ホールにつめかけた満員の聴衆を魅了した。

また、フロリダ州立大学教授・早稲田大学演劇博物館客員教授のスタンリー・ゴントアスキー氏、ロンドン大学教授スティーヴン・コナー氏、カーディフ大学教授メアリ・ブライデン氏による基調講演、ミシガン大学教授イーノック・ブレイター氏らによるパネル・ディスカッションが行なわれ、最先端のベケット研究が披露されたほか、アイルランド大使館、フランス大使館、学習院大学の後援により、トリニティ・カレッジ教授テレンス・ブラウン氏、パリ第8大学教授のブリュノ・クレマン氏、パリ第7大学教授エヴリン・グロスマン氏も来日し、基調講演やパネル・ディ



ベケット頌



J.M.クッツェー氏

スカッションを行なった。

応募者による研究発表は、「身体」、「イメージ」、「自然」、「政治」、「声/沈黙」、「存在/不在」、「劇作法」など、多岐にわたるテーマごとにセッションが生まれ、それぞれにベケット研究の現在をヴィヴィッドに伝えるものとなった。

最終日には、「ベケット頌——『クワッド』によって触発された能役者によるエチュード」と題されたパフォーマンスが演出・笠井賢一氏、出演・清水寛二氏、西村高夫氏、柴田稔氏、谷本健吾氏、打楽器演奏・橘政愛氏により行なわれた。これは、ベケットの晩年のテレビ作品『クワッド』に想を得たもので、橘氏の演奏する神秘的な音楽に乗った美しい舞台に出席者たちは惜しめない拍手をおくり、すばらしいフィナーレとなった。

今回のシンポジウムは、単に海外から研究者を招聘するだけではなく、日本から世界に発信する学会として、日本におけるベケット研究の水準を世界にアピールする絶好の機会ともなった。COE演劇研究センターでは、このシンポジウムを念頭において毎月ベケット・ゼミを開催し、博士課程在学中の若い研究者たちの育成に力を注いできたが、その参加者たちも世界の第一線で活躍する研究者たちに混じって堂々と研究発表を行なった。彼らが世界に羽ばたき、国際的に活躍する大きなステップとなったのではないだろうか。

古典演劇研究(人形浄瑠璃文楽)コース COE公開講座「浄瑠璃」

古典演劇研究(人形浄瑠璃文楽)コースでは、浄瑠璃の復元的研究の最も大きなテーマとして、伝承が途絶えている浄瑠璃作品の復曲に取り組んできた。様々な研究の成果をふまえ、最終的には現役の演者の協力を得て公開の場(公開講座)で演奏していただき、それを録音して次の段階の研究につなげるという作業である。COEプログラムの4年半の間に、演奏を含む「公開講座」を6回実施することができた。プログラムの最終年度にあたり、実務を担当したスタッフの一人という立場から振り返っておきたい。

COEプログラムが本格的にスタートした年、2003年5月26日に、第1回として豊竹呂勢大夫・鶴澤清介による「八重霞浪花浜荻」新屋敷の段を取り上げた。「八重霞浪花浜荻」は人形浄瑠璃全盛期(18世紀半ば)の豊竹座で初演された世話物である。女流義太夫の長老がかろうじて伝承していたこの曲を、次世代を担う演者が受け継いだ。

同年12月1日には、第2回として「木下蔭狭間合戦」竹中砦の段が竹本綱大夫・鶴澤清二郎により演奏された。文楽としては上演されなくなって久しいこの時代物の大曲に、お二人は真正面から取り組んで下さり、聴衆に深い感銘を与えた。

2005年3月10日には、第3回として豊竹英大夫・鶴澤清友により「酒吞童子枕言葉」鬼が城対面の段が演奏された。「公開講座」としては初めて近松作品と取り組み、これまでカットされて伝わってきた台本の一部を演者のご理解とご協力を得て復元した。現行の義太夫節とは異なる古風な節付けであったが、作意を生かした演奏になった。なおこの曲は改めて録音が行われ、同年9月10日にNHK-FMラジオで全国に向けて放送された。

2005年4月に小野梓記念館が新築オープンし、会場を新・小野記念講堂に移して5月30日に第4回の「公開講座」を開催した。第2回で取り上げた「木下蔭狭間合戦」の中から今度は壬生村の段を、同じく竹本綱大夫・鶴澤清二郎が演奏した。この曲は現存する演者では綱大夫しか伝承していないにもかかわらず、これまで文楽公演でも素浄瑠璃でも勤める機会がなく、まさに廃曲寸前であった。伝承に裏付けされた気迫あふれる演奏は、聴衆に新鮮な感動を与えた。「公開講座」の当日が雨に見舞われたのは第2回と今回の「木下蔭狭間合戦」の時だけ。豪雨が勝敗を決した「桶狭間の戦い」の因縁であろうか。

COEプログラム最終年度は2回の「公開講座」を計画した。第5回は2006年9月25日、世話物の大曲といわれながら伝承が途絶えていた「往古曾根崎村噂」教興寺村の段を竹本千歳大夫・野澤錦糸が復曲。端場からの丁寧な演奏である。18世紀後半・混迷期の近松半二の作品ではあったが、戯曲を読むだけでは分からなかった新たな読みを演奏そのものが提示してくれるという現場を実感できた。

2週間後の10月10日、第6回として「北条時頼記」女鉢の木雪の段を取り上げた。この曲は故豊竹呂大夫(2000年9月没)が復曲し、以後数回にわたって練り上げてきたものであったが、その後誰も演じる者はなかった。豊竹座の創始者初代豊竹若太夫めかりの演目でもあるこの曲の演奏を豊竹英大夫・鶴澤清友に依頼した。先人が復曲したものを次の世代が受け継ぐためには、その苦労を追体験することからはじまり、これに独自の解釈や工夫を盛り込んでさらなる仕上がりを目指すという過程を目の当たりにすることができた。

6回の「公開講座」を通じて、復曲はたんに掘り起こすだけではなく、一層の練り上げ、次世代への継承、そして文楽公演での上演を可能にするための台本や演出の整備といった課題が伴うことがよく分かった。復曲は伝承の生きた教材であった。

(文中敬称略)

(客員講師 桜井弘)



第4回公開講座浄瑠璃(2005年5月30日)
「木下蔭狭間合戦」壬生村の段=竹本綱大夫・鶴澤清二郎



第6回公開講座浄瑠璃(2006年10月10日)
「北条時頼記」女鉢の木雪の段=豊竹英大夫・鶴澤清友

演劇理論研究(西洋／比較)コース 活 動 報 告

日豪交流年・早稲田-Dramatic Australia プログラム「ドラマチック・オーストラリア」
「世界をリードする演劇学校-NIDA」

2006年9月26日(火) 18:30～20:30 小野記念講堂

本年は日豪友好基本条約締結30周年を記念する、日豪交流年である。日豪交流に関する様々なイベントや、オーストラリア映画祭や、オーストラリア現代芸術展など、今日のオーストラリアのレベルの高い芸術文化を日本に紹介する催しが目白押しである。その中で、代表的な公式事業の一つ、ドラマチック・オーストラリアは、オーストラリアの舞台芸術、特に現代戯曲を日本に紹介するためのフェスティバルであり、この種のものとしては日本で初めての試みである。ドラマチック・オーストラリアでは、日豪の演劇交流に継続的に関わってきた実践者たちを中心として、多くのプログラムが立ち上がった。その実践者たちには、次のような人々がいる。世界的な芸術祭であるアデレード・フェスティバルに、転形劇場以来数多くの日本現代演劇の参加を実現させてきた国際演劇プロデューサー青木道子、同じくアデレード・フェスティバルに岸田事務所十楽天団として参加して以来、オーストラリアにこだわり続け、またオーストラリアの先住民演劇のリーダーたちとコラボレーションを継続してきた演出家の和田喜夫。そして、オーストラリアの側からは、メルボルンの代表的劇団だったプレイボックスの芸術監督を長く務め、鈴木忠志や日本現代演劇と積極的な交流を推進し、現代は世界的な地位を築いた豪国立演劇学校(NIDA)の校長、オーブリー・メラーがいる。

ドラマチック・オーストラリアはNIDAワークショップ&レクチャー・シリーズと銘打ち、オーブリー・メラーとNIDA講師によるワークショップを、日本の演劇科を擁する各大学で行い、最後にオーブリー・メラーの講演会が、早稲田大学COE演劇研究センターとドラマチック・オーストラリアの共催により実現した。オーブリー・メラーは日本現代演劇を代表するきら星のような演劇人たちが早稲田大学から輩出されたこと、早稲田大学が演劇史・演劇理論の研究について日本で主導的位置にあることに敬意を表し、他大学での実践的な話とは異なり、オーストラリア演劇、そしてその実践者たちの第一の供給源であるNIDAが、どのような歴史的・文化的背景をもとに発展してきたかという、大きな見取り図を描いた。その中で、アメリカ演劇ともイギリス演劇とも違う、先住民演劇の影響やアジア演劇の影響を色濃く受けたオーストラリア独特の俳優の表現方法について、分かりやすく説明してくれた。また、オーストラリアの高度な演劇教育の象徴であるNIDAの、充実した施設と教育システムについて、画像を交えながら説明を行った。

もはや言うまでもないが、NIDAはメル・ギブソンやケイト・ブランシェットなど、今日ハリウッドで活躍する世界的俳優たちを輩出し、世界的に注目を浴びている。今回の一連のNIDAワークショップに、日本の若い俳優たちがこぞって参加したことは、日本の演劇実践者の世界では、すでにNIDAやオーストラリアにおける演劇教育の高い地位は知れ渡っていることを示した。だが残念ながらアカデミズムの世界では、「オーストラリア演劇」自体がマージナライズされているために、知名度が低い。敢えて早稲田大学向けに実践よりも文化史的背景からオーストラリアの演劇教育とNIDAについて語ってくれた今回の講演は、もっと多くの聴衆に聞いて貰いたかったのが正直なところだ。アカデミズムの世界に「オーストラリア演劇」の存在を認知させるために、もっと多くの努力をはらわなければならないとも思われた。

(事業推進担当者 澤田敬司)

演劇論講座「『リチャード三世』の魅力」

講師:河合祥一郎氏(東京大学助教授)

2006年10月14日(土) 15:00～16:30/28日(土) 15:00～16:30

戸山キャンパス31号館311-312教室

今年度の演劇理論研究(西洋／比較)コースの演劇論講座では二人の研究者をお呼びして各二回の連続講義をしていただくことになっている。前期の一ノ瀬和夫氏(立教大学教授)に続き、後期はシェイクスピア研究の第一人者である河合祥一郎氏にお話いただくことになった。今回取り上げるのは日本で何度も上演されている『リチャード三世』である。翻訳台本を作成する上での苦労話や、野村萬斎主演で上演予定の狂言風『国盗人』(『リチャード三世』翻案)を執筆する際の裏話などを交えたご講演は、戯曲と上演、オリジナルと翻訳の関係における重要な視座を提供する刺激的なものであった。

(客員研究助手 川島 健)

アーカイブ構築研究(映像)コース **活 動 報 告**

8月1日から12日まで、小松弘教授を中心に、貝澤哉教授、ニューヨークから参加の志村三代子助手、十重田裕一の4名で、チェコのプラハ、ウクライナのオデッサおよびヤルタにおいて未発見映画フィルムおよび古雑誌調査を行った。

プラハでは、8月2日に国立映画アーカイブ(The National Film Archive)を訪問、その後、ディレクターならびにキュレーターのウラジミール・オペラ氏と映像著作権について意見交換をした。翌3日には、プラハ映画芸術アカデミー(FAMU)の閲覧室を訪問し、1920年代のチェコで発行された映画雑誌を閲覧、その後、付属の映画館を見学する。ここは、アーカイブ所蔵の無声映画、マイナー映画等を上映する120席の映画館である。その後、プラハのギャラリー・ルドルフィヌムのペトル・ネドマ館長を訪問し、来年度の日本映画上映に関する意見交換を行った。

上記機関を訪問する一方、プラハ市街では、第二次世界大戦前映画雑誌をはじめとする貴重資料を精力的に収集した。その結果、古書店で1930年代を中心にチェコの映画雑誌の合本を多数購入することができた。これら貴重な資料は、今後の研究に資するところ少なくない。

8月5日には、チェコのプラハを離れ、ウクライナのオデッサに移動する。古書店ならびに博物館を中心に資料調査をした。それと同時に、セルゲイ・エイゼンシュテインの映画「戦艦ポチョムキン」の撮影場所の現地踏査を行う。8月9日にはヤルタに移動し、オデッサにおいてと同様に、資料調査を実施した。

11日、モスクワ経由で帰国の途につく。10日余の出張であったが、プラハ、ウクライナ、オデッサの各地で、十分な成果を得た充実した調査となった。

なお、プラハでは、COE客員講師のペトル・ホリー氏、ブルナ・ルカーシュ氏のご協力を得た。記して謝意を表したい。(研究協力者 十重田裕一)



プラハ映画芸術アカデミー(FAMU)付属の映画館

演劇理論研究(舞踊)コース **活 動 報 告**

「20世紀バレエ史研究」

この3年間、上記のテーマを掲げて演習を担当してきた。ディアギレフのバレエ・リュスが20世紀バレエの幕開けを告げたことは周知の通りであるが、19世紀古典バレエが世界的に普及すると同時に、バランシンやベジャールが独自のスタイルを確立して世界的名声を得るのは第二次大戦後のことであり、この両者を繋ぐリンクの研究が、とくに日本では、これまで手薄であった。欧米でたんに「バレエ・リュス」といえば、それはバレエ・リュス・ド・モンテカルロを指す、ということも日本ではあまり知られていないが、今日世界中でバレエが親しまれているというこの状況を作り出すのに最大の貢献をしたのはバレエ・リュス・ド・モンテカルロである。ただしこれは単一のバレエ団ではなく、2つのカンパニーがほぼ同時期に活動していた。しかも、振付家もダンサーたちも2つのカンパニーの間を往復していたために、両者の関係は単純ではないのだが、そのあたりの事情も日本ではあまり知られていない。

そこで最初の年には、その一方の、いわゆるバジル大佐のバレエ団の誕生から消滅までを、Kathrine Sorley Walker: De Basil's Ballets Russes (1982)を通読すると同時に、法政大学図書館所蔵「20世紀バレエ・プログラム・コレクション」に含まれる同バレエ団のプログラムの実物をじかに調査することにより、30-50年代のバレエ状況の一端についての理解を深めた。

次年度はLynn Garafola: Legacies of Twentieth Century Dance (2005)に収録された論文を精読することで、20世紀舞踊における美術と音楽の意味、ダンスと映像の関係、リトミックとバレエの関係、バレエ・リュスの文化遺産継承をめぐる問題、女性と振付の関係、などについて考察した。

3年目は「銀幕のバレエ」をテーマに掲げ、バレエと映画の関係、とくに映像文化がどのようにバレエを取り込んでいったか、またハリウッド・ミュージカルにバレエがいかなる影響を与えたかといったことについて、多量の映像を用いながら考察を試みた。



ブリュムムのバレエ・リュス・ド・モンテカルロのプログラム(1941-2)

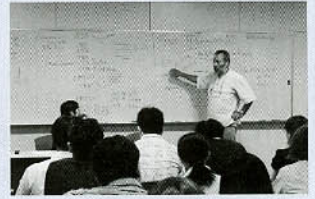
(客員教授 鈴木晶)

芸術文化環境研究コース 活動報告

特別講演会「知られざるスタニスラフスキー ～後期スタニスラフスキー・システムについて～」

2006年8月23日(水) 18:00～20:30 大隈記念タワー 3階会議室

ロシア最大の演劇大学である国立サンクト・ペテルブルグ演劇大学の演技演出専攻教授であり同大学副学長を務めるセルゲイ・チェルカスキー教授をお迎えして、特別講演会を開催した(日本演出者協会との共催)。チェルカスキー教授は、演出家として数多くの作品を演出してきたほか、20世紀のロシア演劇学校における演出家教育についての研究も進めている。今回は、スタニスラフスキー・システムの概要とともに、特にその後期に焦点をあて、ロシア国内での展開と英語版へ翻訳された際のタイトルや分量、また年代などの点から、アメリカを始めとする各国でのスタニスラフスキー・システムの受容について講演いただいた。夏休み中の夜間にも関わらず、90名ほどの参加者が集まり、教授の気さくな性格と聴衆の関心をうまく集める進行で、会場は熱気と一体感に溢れ、大変充実した講演会となった。



「Witness to Process」プレゼンテーション

2006年7月11日(火) 18:00～20:00 西早稲田キャンパス6号館314教室

ミドルセックス大学(英国)内にあるレッスン研究所は、パフォーマンス・アーツの理論と実践を繋ぎ、新しい研究方法の開拓、創作の場へのフィードバック、さらに教育や社会への応用を目指すユニークな研究所として活動している。クリストファー・バナーマン研究所長(同大学教授)とジョシュア・ソファー研究員(パフォーマンス・アーティスト)に、同研究所のプロジェクトについて発表していただき、ダンサーを始めとするアーティストとの共同研究における研究者とアーティストの役割分担やその課題、文化施設や教育施設で活用可能なパッケージ型教材の開発とその利用、といった話題を切り口に、こうした研究がもたらす可能性について議論した。(客員講師 宮崎刀史)

アーカイブ構築研究(演劇)コース 活動報告

2006年8月28日から9月1日まで、オーストリア・ウィーンにてSIBMAS(国際演劇図書館博物館連盟)2006年国際会議が開かれ、演劇博物館の山本浩幾、教育学部講師・元演劇博物館助手の八木雅子、現演劇博物館助手・COE特別研究生の萩原健が参加、八木と萩原が演劇博物館の活動について発表、また会期中に他の演劇博物館・資料館の代表者と情報交換を行った。



会議の会場となった
ウィーン美術史博物館



会議場内の様子

SIBMASとは仏語の Société Internationale des Bibliothèques et des Musées des Arts du Spectacle の略で、英語名は International Association

of Libraries and Museums of the Performing Artsである。このことが示すように、組織が設立されたのは仏語圏であるベルギーで、設立年は1954年、以来、欧州を中心に、各国の演劇博物館・資料館が団体会員として、舞台芸術の記録に関する理論的・実践的研究を行っている人々が個人会員として加盟している。仏英二ヶ国語を公用語とし、主な活動内容として、世界の演劇図書館・博物館ディレクトリの作成や、隔年で開催される国際会議がある。

演劇博物館は今年度よりSIBMASに加盟し、ただちにこの国際会議に参加、発表も行い、さらに2008年国際会議(グラスゴー)の実行委員に萩原が選出されるなど、その存在を各国の演劇博物館・資料館に強く認識させることに成功した。またENICPA(ベルギー)やThe Theatre Information Group MLA SSN Partnership Project(英)、The Portrait Collection Friedrich Nicolas Manskopf(独)などによる、電子化やデータベースに関する複数の発表から多くのヒントを得ることができた。

今回、このような情報、および他の演劇博物館とのコンタクトを得て、早稲田大学演劇博物館の国際的なネットワークは今後、人的なそれはもちろん、オンライン・データベースの国際共同作成などアーカイブ構築の面でも一段と発展していくことだろう(SIBMAS公式サイト:<http://www.sibmas.org/>)。

(演劇博物館助手・特別研究生 萩原健/演劇博物館 山本浩幾)

古典演劇研究コース 活 動 報 告

研究会紹介：加賀藩能楽資料研究会

古典演劇研究（能楽）コースでは、2004年度より加賀藩の能楽資料を輪読する研究会を行っている。

本研究会では事業推進担当者・特別研究生だけでなく、棚町知彌氏（国文学研究資料館名誉教授）・入口敦志氏（同資料館文学資源系助手）の両氏に研究協力者としてご参加いただいております。両氏のご指導の下、棚町氏が収集した藩政記録所載能楽関連記事を検討している。

研究会は月に一度資料の輪読を行う形で進められ、今年度で3年目を迎えた。これまで輪読してきた資料は5代藩主前田綱紀の治世であった元禄年間のもものが中心で、現在も金沢に残る加賀宝生の礎となる宝生流御用役者登用の記録や、側近や御細工所（藩の工房）の職人に謡や囃子の稽古を推奨し、綱紀自身の稽古の相手をさせる記事、演能記録、100人余にも及ぶお抱え役者や覚書、綱紀による役者への細かい指示などが散見する。また、江戸宝生座大夫宝生九郎友春や茶道裏千家の始祖仙叟千宗室、儒学者木下順庵らと加賀藩による書簡のやりとりなども管見に入り、加賀藩が文化の町として繁栄していく過程で前田綱紀が及ぼした影響がいかに大きいかあらためて知ることができる。

なお、本研究会での成果は、今年度の『演劇研究センター紀要』にて報告の予定である。

（客員研究助手 江口文恵）



演劇理論研究(東洋)コース 活 動 報 告

今年6月の「モンゴル演劇・映画講座」におけるモンゴル国立演劇博物館D.ツェドマー館長の来日を機に、日本・モンゴル両国間の演劇博物館交流が開始され、相互交流の一環として、今夏、当方によるモンゴル訪問が実現した。まず、第一陣として、8月19日（土）から23日（水）まで、田村容子（演劇博物館助手）と木村理子（客員研究助手）が、モンゴル国立演劇博物館と国立ドラマアカデミック劇場を表敬訪問、また地方劇場視察のため、バヤンホンゴル県立「音楽ドラマ劇場」とカラコルム郡立「文化センター」を訪問した。民主化後、モンゴルの劇場では、イデオロギー宣伝の基地としての機能喪失に伴い、党による指導体制と財政基盤が崩壊、さらに市場経済への移行によって、都市部との経済格差の拡大、地方の過疎化と財政難が進む中、今日、社会主義時代に建設された地方劇場の多くは旧時代の「遺物」と化し、その活動はほぼ休止状態にある。今回の地方視察では、劇場が人口と経済によって成り立つものであることを痛感すると同時に、現場の人々が、民主化後の新しい社会に適した、地域に密着した「パブリックシアター」としての劇場の機能

を確立しようと芸術環境教育にも努めつつ細々ながら様々な活動に着手している現状を目の当たりにした。また、第二陣として、9月4日（土）から6日（月）まで、平林宣和（事業推進担当者）がモンゴル国立演劇博物館を表敬訪問、ツェドマー館長より同館が所蔵する写真資料90点のデータが早稲田大学演劇博物館に対し寄贈された。続いて、国立ドラマアカデミック劇場D.ツェレンサンボー劇場長を表敬訪問した他、モンゴルの「コメディシアター」を代表する俳優陣との懇談会などに参加した。二回にわたる今回のモンゴル行は、両国間の演劇博物館交流の第一歩となったばかりでなく、モンゴル側の尽力によって、短期間ではなかなか知り得ない現代モンゴル演劇の現状に数多く触れる機会を得、今後の東アジアの演劇研究に文化的・地域的広がりをもたらす有意義な訪問となった。

（客員研究助手 木村理子）



2006年7月11日、モンゴル国家祭典「ナーダム」開会式（演出：国立ドラマアカデミック劇場）。

今年は大モンゴル建国800年を祝し、盛大な開会式となった。

（写真左より国立ドラマアカデミック劇場D.ツェレンサンボー劇場長、女優G.オルナー、功勳俳優B.ジャルガルサイハン）

Event Calendar

国際シンポジウム「散楽の国際性」

開催日:2006年12月8日(金) 10:00～/12月9日(土) 10:00～
 場所:早稲田大学小野記念講堂(小野樟記念館地下2F)
 (入場無料・予約不要)

12月8日(金)

- 10:00～11:00 竹本幹夫(早稲田大学教授・演劇博物館館長)
 基調講演「散楽の国際性をめぐって」
- 11:00～12:00 シャファイ・ラマン(インド インディアン・エクスプレ
 ス新聞社文化政治担当主筆編集委
 員)
 「The secular practice of Arabanamuttu, Kerala's
 Islamic art form」
 (インド、ケララのイスラム芸能「アラバナムトゥ」
 の芸能)
- 13:30～14:30 森尻純夫(インド マンガロール大学客員教授)
 「武術と大道芸、その信仰」
- 14:30～15:30 テッパ・ウィテド(モロッコ カディ・アヤード大学
 教授)
 「Cultural Heritage and Oral Tradition in The Jemaa
 El Fna Square (in Marrakech-Morocco)」
 (モロッコ、マラケシュの「ジェマ・エル・フナ広場」
 における文化遺産と口頭伝承)
- 16:00～17:00 成澤勝(中国 延辺大学教授)
 「百済楽との関わりから味摩之伎楽の淵源を問う」
- 17:00～18:00 天野文雄(大阪大学教授)
 「猿楽(散楽)と乱舞の関係をめぐる一、二の問題」

12月9日(土)

- 10:00～11:00 スティーブン・ネルソン
 (法政大学教授)
 「奈良時代・平安前期の雑
 伎・散楽をめぐって」
 (Acrobatic and humorous
 entertainments in eighth
 and ninth-century Japan)
- 11:00～12:00 王連茂(中国 泉州海外交
 通史博物館館長)
 「泉州の古典音楽と戯劇及
 其在東亞海域地区の伝播」
 (泉州の古典音楽と演劇およびその東アジア海域地区
 の伝播)
- 13:30～14:30 康保成(中国 中山大学教授)
 「周代的散楽と夷楽」
 (周代の散楽と夷楽)
- 14:30～15:30 延保全(中国 山西師範大学戯曲文物研究所教授)
 「宋元戯台と戯劇」
 (宋元の戯台と戯劇)
- 16:00～18:00 パネルディスカッション
 司会:細井尚子(立教大学助教授)



この国際シンポジウムは、能楽の源流となった日本の古代芸能「散楽」が、その母胎である中国の散楽・百戯や、さらにはユーラシア・地中海世界の各地において、どのような起源と歴史を持っているのか、また日本の能楽とそれら世界の芸能との間にはどのような関連があったのかを探ろうとするものです。インド・モロッコ・中国・日本から講師をお招きし、この芸能の発祥や伝播について、各国の最先端の学説を紹介していただきます。

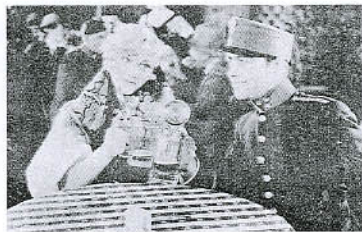
◆アーカイブ構築研究(映像)コース

失われた映画を求めて—アーカイブ構築プロジェクト・コレクション公開
 開催日:2007年1月20日 13:30～18:00

場所:早稲田大学小野記念講堂

(入場無料・予約不要)

- 13:30～15:00 第一部 映画上映 D・W・グリフィス作品集(1908-09年)
 【解説】 檜山博士(演劇博物館21世紀COE特別研究生)
- 15:30～17:30 第二部 映画上映 無声映画の断片集
 —復元された映画コレクションより「ニッポン」ほか—
 【解説】 小松弘(早稲田大学文学学術院教授)



『女の一生』(1929年)
 監督:ジョセフ・フォン・スタンバーグ

「春柳社百年記念国際シンポジウム」

開催日:2007年2月3日(土)/2月4日(日)

場所:早稲田大学西早稲田キャンパス

6号館3階318号室(レクチャールーム)

(入場無料・予約不要) 使用言語:中国語(通訳無し)

中国側発表者

田本相(中国芸術研究院話劇研究所元所長)、宋宝珍(中国芸術研究院話劇研究所副所長)、劉平(中国社会科学院文学研究所教授)、顧文勳(南京大学教授)、袁国興(華南師範大学教授)、黄愛華(杭州師範大学教授)、張軍(海南大学助教授)

日本側発表者

神山彰(明治大学教授)、飯塚容(中央大学教授)、瀬戸宏(摂南大学教授)、松浦恒雄(大阪市立大学教授)

2007年は、1907年に日本で中国人留学生らが結成した芸術団体である春柳社が誕生してからちょうど100年目にあたる。それを記念し日中両国の演劇研究者が集い、春柳社および同時期の演劇に関する研究成果を発表する。中国側から7名の中国演劇研究者を招聘し、日本側からは日本演劇研究者と中国演劇研究者が参加する。

*以上のイベントの開催場所に関しては、右記のホームページをご参照ください。http://www.waseda.jp/jp/campus/index.html

演劇研究センターメールニュース配信のお知らせ

演劇研究センター主催の公開研究会やシンポジウムなどの情報をメールニュースでお届けします。

- (1) 配信は不定期です。
- (2) 個人情報メールニュースの発信および演劇研究センターからのお知らせ以外には使用いたしません。
- (3) ご不要の場合にはいつでも配信を止めることができます。
- (4) 携帯電話のメールアドレスには配信いたしません。

登録は右記のホームページからお願いします。http://www.waseda.jp/prj-21coe-enpaku/index.html



『復元 幻の「長時間レコード」 山城少掾 大正・昭和の文楽を聞く』
CD5枚組 解説リーフレット(60頁)付
協力:早稲田大学坪内博士記念演劇博物館/早稲田大学21世紀COEプログラム
「演劇の総合的研究と演劇学の確立」
製作:株式会社ボルケ
発行:株式会社紀伊國屋書店
価格:12,000円(税込)
発売日:2006年10月28日

『復元 幻の「長時間レコード」 山城少掾 大正・昭和の文楽を聞く』 (株式会社紀伊國屋書店 2006年10月発行)

古典演劇研究(人形浄瑠璃文楽)コースでは、浄瑠璃の復元的研究のひとつとして、大正末から昭和初年にかけてニッソーから発売された「長時間レコード」の再生に取り組んできた。「長時間レコード」は、回転数が一定しているSP・LPレコード等とは異なり、常に回転数を変化させることで、より長い時間の録音・再生を可能にした画期的な発明であったが、技術的にも営業的にも失敗に終わったものである。義太夫節関係では、二世豊竹古鞠太夫(後の山城少掾)の「熊谷陣屋」「沼津」「鎌倉三代記」が発売され、演劇博物館にも所蔵されている。いずれも山城少掾が50歳前後、太夫として最も脂の乗り切った時期の録音で、資料的価値も高いものである。特殊な再生装置を必要とするため幻のレコードとされ、これまでもNHKなどでその再生が何度か試みられてきたが、いずれも技術者の経験と勘に頼った手作業による再生に終わっていた。今回は、音声をいったんデジタルデータ化し、波形編集ソフトを用いて80年前の演奏を科学的に再現することができた。その成果は、本年3月18日のCOE公開講座「義太夫節の長時間レコード」で公開したが、このたび紀伊國屋書店ならびに関係各位のご理解とご協力を得て、広く一般にもお求めいただけることとなった。(客員講師 桜井弘)

『中国10億人の日本映画熱愛史—高倉健、山口百恵からキムタク、アニメまで』 (劉文兵著 集英社 2006年8月発行)

文革直後の中国で起きた日本映画ブームについて、ひとつの流行現象としてしばしば言及されてきたとはいえ、社会学・映画学の両面から包括的に分析するような研究がほとんどなされてこなかったのが現状である。本著『中国10億人の日本映画熱愛—高倉健、山口百恵からキムタク、アニメまで』(集英社新書)は、戦前から現在に至るまでの中国における日本映画受容の軌跡を辿りつつ、文革直後の日本映画ブームの歴史的・社会的背景を明らかにするとともに、日中文化交流史において映画というメディアが果たした役割について考察するものである。

(演劇博物館外国人研究員・元特別研究生 劉文兵)



作者:劉文兵
出版社:集英社
価格:700円(税別)
発売日:2006年8月12日
メディア:新書

2006年度日本演劇学会河竹賞受賞作品紹介

『中国話劇成立史研究』

(瀬戸宏著 東方書店 2005年2月発行 541頁 14,000円)

本書は、瀬戸宏が1977年以来発表してきた中国話劇成立史に関する論文を整理し、書き下ろし論文などを加えたものである。四百字詰原稿用紙換算で約八百枚。2003年に早稲田大学に提出した博士学位論文を、全面的に改訂した。話劇とは会話とそれに伴う身体表現を基礎とする演劇形態で、ほぼ日本の新劇に相当する。本書は一般的演劇研究者からも高く評価され、2006年度日本演劇学会河竹賞を受賞した。中国文学演劇研究以外の演劇研究者にも読まれることを、著者は願っている。

(客員講師 瀬戸宏)

編集後記

9月には「国際サミュエル・ベケットシンポジウム」が大盛況のうちに終わり、後期も引き続き様々な公開講座が開催されています。今号編集会議の時期には、6名の編集委員のうち3名が研修留学中、1名が海外出張中でしたが、留学先からメールをいただき、みなさんの協力を得て、無事今号発行に至りました。早いものでCOEの活動もあと半年足らずとなりました。まだまだ、公開講座や映画上映会、散楽シンポジウム、春柳社百年記念国際シンポジウムなど、多彩な行事が続きます。みなさんと一緒に、最後まで元気に頑張っていきたいと思います。

News Letter 第5号

2006年11月20日

編集:江口文恵 川島京子 川島健 木村理子 志村三代子 宮崎刀史紀

発行者:早稲田大学21世紀COEプログラム〈演劇の総合的研究と演劇学の確立〉

拠点リーダー 竹本幹夫

早稲田大学演劇博物館・演劇研究センター

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1

TEL: 03-5286-8110

URL: <http://www.waseda.jp/prj-21coe-enpaku/>